

---

---

## 沖縄の歴史情報研究への関わり

高橋 延匡：東京農工大学名誉教授

---

筆者は、東京農工大学の数理情報工学科に1977年4月に着任した。それまで日立製作所で国産コンピュータのOS等の研究開発に携ってきた。当時の日本では、汎用コンピュータが普及していたにもかかわらず、日本文化の基底となる日本語をコンピュータで処理するのはIBMがやらない限り、ほとんど開発対象ではなかった。

大学に移って、やりたかったことは、日本語を処理するコンピュータとその基幹となるOSの開発研究である。それと、当然日本語自身の入力と出力の問題である。OSについては、市販のモトローラ系、インテル系を対象として、OS/omiconとしてまとめることができた。現在、科研費研究で、大学に配布し教育に使用してもらうための研究もスタートした。また、入力は、オンライン手書き文字認識(英数字、仮名、漢字)の開発研究(JOLIS)も発展し、現在、同大学の中川正樹教授が引き継いで、企業とコンソーシアムを作り意欲的に研究開発を行っている。出力系は、キャノンから、LBPのハードウェアがOEMで初めて発売されたとき、それを購入し、浄書(JOSH0)として漢字の出力系を完成させ、現在、3代目のシステムが稼働している。

そんなことから、京都大学の萩原宏先生(当時、同大学大型計算機センター長)から、文科系の研究会に出てきたら、とのお誘いを受け、それが縁で今回参加することになった。

さて、本重点領域研究で、筆者に何が貢献できるだろうかを考えてみた。

第一は、情報科学の専門家としてコンピュータの利用という面でプロジェクトの方向が、間違った方向にいけないように、少し貢献できるかも知れない。というのは、マイクロエレクトロニクスの技術革新のスピードが3年で4倍のペースを上回るほどなので、コンピュータハードウェアの陳腐化のスピードを考える必要がある。

第二に、ネットワーク時代、特に、インターネットのデファクトスタンダード(事実上の工業標準)化で、それをベースに考えていく必要があるという認識のPR。

第三に、学問研究の方法、すなわち、従来の情報の囲い込み(情報の独占)による優位性の主張で代表されるセクショナリズムはネットワークオープン化の時代では、世界から相手にされなくなるという「時代の考え」を、私のような異分野の人間が、主張することは、頭では分かっているが、そのような広い心に踏み切れない人に対して、参考になるのではないか。

第四に、歴史情報の持つ、種々の情報の形態がある。従来、情報科学のデータベースは、事実上テキスト(文字列)しか、対象としていなかったといっても過言ではあるまい。そこで、実際のコンテンツを通して、マルチメディアデータベースの研究の本質的問題と技術的問題を把握したいというものである。この点に関し、同僚の並木美太郎助教授が、種々の開発実験をしたのが、将来生きるものと期待している。

最後に、情報処理学会の研究会と論文誌は大改革中であることをお伝えしたい。すなわち、「人文科学とコンピュータ」などの研究会が独自のレフリー制度を導入し、学会として承認すれば、独自の論文誌を発行できるようにした点である。これは、情報の広い分野に対して、狭い評価規準(理学・工学的評価規準)だけでなく、情報科学との広いインタディスプリタリーの分野に対して門戸を開放しようとする改革である。この分野の研究者が、情報の分野でも、活発な研究をしていただければ幸いである。